

株式会社エーデルワイスには
日本はもちろん、
世界随一というコレクションがある。
それは、ヨーロッパで使用されてきた、
お菓子の型や製造器具などの
コレクションである。

そのコレクションは
約5000点にも及ぶ。

情熱の洋菓子職人
The artisan spirits ~Tsuyoshi Hiyané Story~

比屋根毅物語

〈第十二話〉

漫画：佐藤晴美

(大手前大学 メディア・芸術学部 講師)

以前は、尼崎の本社工場に、
これらのコレクションが集められた
ミュージアムがあった
(現在は新社屋を建設中)。

毅は、技術者たちに
こう話している。



毎日、この展示室に
足を運んで、

これら何百年も前の
道具たちの前で拝みなさい
そうしたら、さまざま
アイデアが浮かんでくるだろう

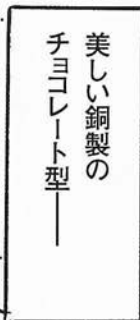
これらには、
職人たちの魂が
宿っているのだから



何度も修復を
重ねながら、
何百年にもわたって
使用されてきたと思われる
木型――



美しい銅製の
チヨコレート型――



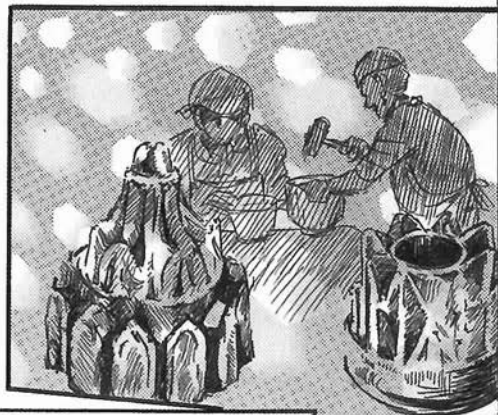
そして数百年前から伝わる
お菓子のレシピを書いた
書籍――



かのマリ・アントワネットも
大好きだったといわれる「クグロフ」。
これは帽子の形をした焼き菓子で、
それらの型は、銅や、陶器、
ホーローで作られている。



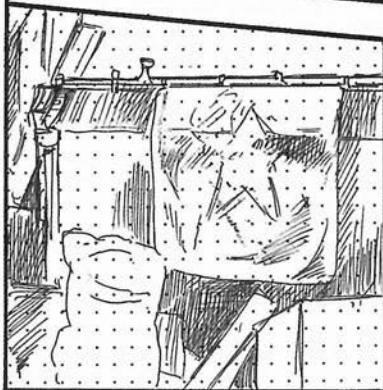
これらは職人によって
手づくりで一つ
丁寧に作られた菓子型である。



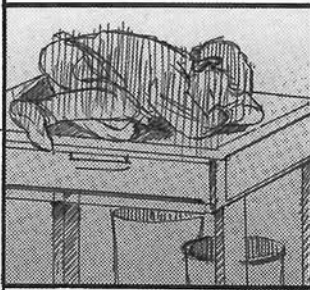
そして貴族たちの
華やかな生活を思わせる、
豪華な「ボンボン入れ」
―菓子容器。―



このテーブルは、
引き出しの中に
パンだねを入れ、一晩
発酵させるためのものだ。



「小麦粉ふるい機」なるもの―
―袋についた小麦粉を
きれいにふるい落とすためのもの。
小麦粉が貴重であったころ、
ひとつまみの小麦粉さえも
むだにならないように作られた
機械である。



上に職人が横になり、
眠っているうちにその体温で
温められた生地が
発酵する―。

毅が初めて、こういった
コレクションを目にしたのは、
まだ30代の頃だった。

スイスのあるチョコレート店で、
古い菓子型が展示されて
いたのである。

これは
何年くらい前に
使われていたもの
なのでしょう



そうだねエ…
…祖父か
その前からだから
200年ほど前かな

今も
毎日使っているよ

それらは現在も
となりの工房で
使われていたのだ。

毅が修業を受けた
ヨーロッパの菓子工房でも、
2000年や3000年前の器具を
使っていた。

これには遠い昔から
受け継がれてきた職人の
魂が宿っている…!!

すばらしい

毅は、菓子文化研究家で、
現在はエーデルワイス顧問に
就いている平田栄三郎氏に
相談をもちかけた。

平田先生！
お菓子文化に関する
コレクションを集めたいんです
——それらが失われてしまう前に
集めて、遺していきたいんです……！

なるほど

平田氏は
和菓子の製造器具
などの収集家
でもあった。

洋菓子ならば
ヨーロッパの街で
ときどき行なわれる
「のみの市」に
そいったものが
出品されることが
多いらしいが

のみの市！

毅にはある夢があった。

いつかこれらの道具や、菓子箱、菓子型などを集めた、菓子店をつくりたい

ミュージアムだけでなく、レストランもあつて——工場もあつて——その古い道具で作ったお菓子が見られて、それを食べることもできるそんな店を、日本にもつくる

あのスイスで見た小さなチヨコレート美術館のような…



ヨハン・ヴァン・オプロイ
という人物だ



菓子博物館?

ベルギーの人でね
菓子博物館を
やっている人が
いるんだ

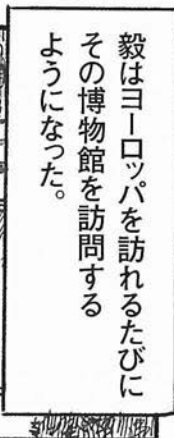
菓子に関する古道具を
買い集めている穀のうわさを
聞きつけて、ある人が紹介された。



ようこそ!!
私のコレクションの
一部ですが
ごらんになってください



やあヒヤネ
またすばらしい
逸品を手にする事が
できたんだ!



穀はヨーロッパを訪れるたびに
その博物館を訪問する
ようになった。



オプロイ氏は
3500点以上の
菓子に関するコレクションを
所有していた。

す、すごい





それは
何回も通いつめた
ある日のことであつた。





ええッ!!?

全部買う!?

驚いたのは
社員たちであった。

社長!

ほしいものだけ選んで
譲ってもらえば
いいのでは?
3500点なんて...

いや、
ああいう人は
全部まとめて
でないと
売らないよ
きつと

オブロイ氏からコレクションを
ゆずりうけ、その後も
集められてきた文化資料は
現在約5000点。

その一部は
今年行なわれた
姫路菓子博でも展示された。

来年には、これらのコレクションを
すべて展示したミュージアムが、
エーデルワイス本社に
オープンする予定である。

これらの古い道具たちが
私たち菓子職人を今も
見守ってくれているんですよ

続

似顔絵

出石アカル

絵 菅原洸人

題字 六車明峰

「おもしろいものを作ってきました」と、菅原洸人さんがやって来られてからもう一年半になる。

おもしろいものとは、わたしと家内の似顔絵が描かれた手作り看板のことで、この話はこの連載の第60回に書いた。以来ずっと店頭を明るく飾っている。

ところが、あまりにも似ていて、朝開店の時、前を人が通ると店頭にかけるのを少しとまどう。常連さんに見られるのは、もう何でもないので、知らない人に見られるのは、絵とわたしを見比べられるようで気恥ずかしいのだ。

お客さんの中には、わたしの顔を見てからもう一度外へ出て看板を見、改めて入ってきて「ホンマ、似てるなあ」と言う人も。

で、今回は似顔絵の話。

*

*

店の壁面の多くの絵の中に、うちの子どもが昔

描いたものを紛れ込ませている。今この時期は、長男が小学生の時に描いた「晩秋の酒蔵」。夕陽に輝くこのレンガ造りの酒蔵は、あの地震で崩壊してしまつて今はない。

もう一点、わたしが密かに楽しんでいる絵がある。娘が幼いころに描いた家内の似顔絵だ。似顔絵を描くコツを聞いたことがあるが、女性を描くときは少しだけ若めに、そして少しだけ美人に描くのだと。娘はそんなことは知らなかっただろうが、母親を少し美人に描いている。願望がこのように描かせたのかも知れない。これもわたしは、そつとさりげなく飾っている。

そこでわたしには思い出すことがある。

三歳の孫、滉に見せて「これだれ？」と聞くと、迷わず「おかあさん」と答える、娘を描いた似顔絵のことだ。

十九年前の十二月。娘と二人で神戸元町一番街を歩いていった時のことである。

今はもうない丸善の前で若い似顔絵描きさんに声をかけられた。娘を描かせてくれと言うのだ。娘は当時13歳の中学生。急いではいなかったのだ、いい思い出になるだろうと思ひ描いてもらうことにした。

彼が描きだして間もなく、浮浪者のような身なりの老人がわたしに声をかけた。「描かしてもら

えないか？」と言うのである。承諾すると彼は丸善に入って行き、画用紙とコンテを買って来て、若い画家から少し離れて娘を描きはじめた。

二人の画家が、あの人通りの中で一人の娘を描いているのである。ちよつと変わった光景であつた。

若い画家に焦りのようなものが見えた。わたしは気が気ではなかつた。老画家の方がもしも上手だつたら、どうしようかと思つた。

はたして、老画家の描きはじめた絵を見てわたしは驚いた。上手いのである。

わたしが驚いた様子を見て、若い画家もその絵をのぞく。そして、「アッ、うまい！ ぼくよりうまい」と驚きの声を上げた。

素人目にも、老画家の方が上手であつた。絵が生きているのである。娘が生き生きと描かれている。線がしっかりと引かれていて躊躇がない。瑞々しく勢いのある絵である。

若い画家はそれから後、一心不乱に娘を描いて、二人の絵が描き上がるのはほとんど同時だつた。

老画家の絵は素晴らしい出来栄えだつた。わたしは正直、そちらの絵の方が欲しかった。しかし「その絵を譲ってください」とは頼めなかつた。若い絵描きさんに悪い気がしたのである。彼に代金を払い、彼の絵を持って帰つた。その絵も決して下手ではない。見事に娘にそっくりである。そ



して少しだけ美人に描いてある。老画家の絵を見なければ大満足の絵だ。しかし、よりいい絵を見てしまった。そちらの方が欲しい。もしかして「よければどうぞ」と進呈してもらえないだろうか。と虫のいいことを思つたりした。だが彼は、何事もなかつたようにその絵を携えて人込みの中へ消えて行つた。

それから十九年、娘の似顔絵を見るにつけ、あの若き画家は今どうしているだろうか、立派な画家になつてゐるだろうか、と思う。

また、あの老画家はどんな事情があつて、あのような身なりだつたのだろうか、どんな気持ちで娘を描かせて欲しいと言つたのだろうか、なぜ進呈してくれなかつたのだろうか、どこの誰だつたのだろうか、と想いを巡らすことがある。

さらに、最も気になるのは、老画家の描いたあの娘の絵の行方である。

1989年12月10日、元町の丸善の前で娘を描いてくださった老画家さん、元気でおられたら連絡ください。お会いできたら、改めて「あの絵を譲ってくださいませんか？」とお願いします。

■ 出石アカル(いずしあかる)一九四三年兵庫県生まれ。「風媒花」「火曜日」同人。兵庫県現代詩協会会員。詩集「ヒーカンの耳」(編集工房「ア刊」にて二〇〇〇年第三十回フルメール賞文学部門受賞)。

《神戸異人館物語》

夜明けの

ハンター



ハンター肖像

勇気ある退却

三条杜夫
絵・谷口和市

キルビーが思いがけなく、拳銃自殺をとげてしまったことから、経営者を失った小野浜造船所はこれまでかと思われた。折しも、海軍からの依頼で軍艦「大和」の建造中であつたことから、小野浜造船所を海軍が見捨てなかつた。キルビーの死を悼む人たちの悲しみがつのる明治十六年の暮れが過ぎて、明けて明治十七年。まだ新年の気分も世間では抜けきらないうちに、小野浜造船所は加納湾と

共に海軍省に買い上げられたのである。それまでの民間造船所から、海軍省主船局付属小野浜造船所と改められた。不慮の死をとげたキルビーの志を尊重して、海軍省は従業員をそのまま雇い入れる方針でのぞんだ。大方の従業員たちはほっと胸を撫で下ろした。

「キルビーさんのやり残した仕事を我らの手で完成させよう」

「もちろんだ。経営が国に変わっても、キルビーさんが作った造船所に違いはない。仕事だけはしっかりとやりとげよう」

従業員たちがますます結束を強める一方で、ただ一人、首を縦に振らないのは志津であった。

「せっかくのお国の配慮、身にしてみてもありがたくは思いますが、私だけはここに留まるわけには参りません」

思いがけない態度に、主立った従業員たちが口を揃えて言う。

「何故ですか？」

「志津さんこそ、ここに残ってキルビーさんのやり遂げられなかったことを見届けるべきだとあつしたちは思いますが？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

志津の目に改めて涙が浮かぶ。

「このまま、ここにいと、辛過ぎます・・」

この一言で、みんなは言葉を続けられなくなった。大きな夢を抱いて、故国を捨て、見知らぬこの日本で、ビジネスの足跡を残しながら、全く思いもかけぬ展開で自らの人生に幕を下ろしてしまったキルビー。その人生の最期に親しい人物として関わってきた志津である。考えてみれば、自分自身の人生もまた、大きな狂いが生じてしまった志津であった。

「どうか、皆さんはここに残って、せめてキルビーの果たせなかった軍艦『大和』を立派に完成させてやって下さい。お願いします」

志津が頼み込む。それは志津の本音であった。

「志津さん、あつしたちの頭として、引っ張っても

らえませんか？」

「それはいい考えです」

従業員の多くが同調する。

「志津さん、キルビーさんに成り代わって、あつしたちを引っ張って行って下さい」

「お願いします！」

従業員たち一同の一致した考えだった。しかし、志津は、

「皆さんのお気持ちは、嬉しいです。キルビーも喜んで皆さんの声を聞いてくれることと思います」

「じゃあ、あつしたちの頭になつてくれますね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「お願いします！」

男たちの誰もが深々と身を折って懇願する。キルビーにビジネスの枠を越えて、人間として尊敬の念を寄せ、慕ってついてきた男たちがここにいる。そのキルビーが愛した女性を今、せめて自分たちの指導者にと純粋に考える男たちなのである。

「ごめんなさい・・・・・・・・」

それだけ言うのがやつとの志津だった。みんなが心から引き留めるのもきかず、いつしか志津がすつと姿を消した。どこへ行ってしまったのか、その消息が全くわからなくなったまま、歲月だけが過ぎていった。

キルビーが自らの命と引き換えに海軍省にバトンタッチした小野浜造船所は、官営造船所としてほどなく、軍艦「大和」を完成させる。時代が進んで昭和の時代、第二次世界大戦の末期に、戦艦「大和」が造られ、太平洋の戦場へ向かう途上で米軍の爆

撃を受けて沖縄近くの海の底深く沈没してしまつた事実は多くの人たちが知るところだが、その六十年余り前に、軍艦「大和」が建造されていた事実は意外に知る人が少ない。また、その発端を英国人キルビーが成した事実はさらに知られていない。

ちなみに、小野浜造船所では、その後、軍艦「赤城」「摩耶」なども建造し、のちに元帥として有名な東郷平八郎が、まだ中佐として駆け出しの時に、花隈にあつた官舎から監督に通つたのもこの造船所であつた。参考までに、この小野浜造船所は明治二十三年、呉鎮守府くれしんじょうふの管轄に属して小野浜分工場と改称される。その五年後の二十八年、工場閉鎖となり、さらにその後、小野浜鉄道操作場を築くために大正四年に加納湾が丸ごと埋め立てられてしまい、跡形もなくなつて、キルビーの活躍も、小野浜造船所の存在も、歴史の彼方へと消え去つてしまうのである。

さて、ここで、物語の舞台を明治十七年に戻そう。明治十七年一月。いつもと変わらぬ新しい年の始まりなのに、これまでとは全く違う寂しさがハンターの胸一面にたちこめていた。それは、言うまでもなく、恩人のキルビーがこの世にいなくなつてしまつたことによる。ぽつかりとハンターの心に穴が開いてしまつた。キルビーが拳銃自殺をするとは、想像だにしないハンターであつた。それだけに、むなししい気持ちはどうすることもできなかった。

愛子が氣を使つて、これまでにままして、ハンターの身の回りの世話をやいてくれる。しかし、キル

ビーは戻つてこない。キルビーは加納湾の北に位置する小野浜墓地に眠つてゐる。元氣をなくしたハンターを見て、秋月がやきもきする。

「どうしましょう？ 資金繰りがどう見ても、うまくいきそうにありませんが？」

「……」

ふさぎ込んだハンターはすぐには返事をしない。愛子が氣を使つてフォローする。

「あなた、無理をしない方法で何らかの手を打てればいいですね」

秋月が資金繰りの担当者としてハンター以上に心配している。

「道修町の小西儀助商店こにしぎすけの話は聞きましたが、先代が今から十四年ほど前に京都から大阪船場に店を移して、頑張つたにもかかわらず、資金繰りがうまくいかなかつたので、先代はすばつと身を引いて、彦根から新しい経営者を招いたそうです。二代目儀助さんは近江商人の知恵を絞つて三年で経営を建て直したというのが語り草になっています」

その話は米田左門から聞いた内容だつた。米田左門は教育者にとどまらず、昨今は経営指南役もまたこなし、今にいう経営コンサルタンのような役割も演じて兵庫や大阪界限ではちよつと名の知られた人物に成長していた。

「ソノ話ハ私モ知ツテイマス。小西儀助商店ハ今、工業薬品ヤアルコールニ加工エテ、アサヒ印ビールトイウ新商品ノ研究モシテルソウデスネ？ ソノ話ト秋月サン、ドウイウ関係アリマスカ？」

「はい。米田先生の教えでは、どうしてもうまくことが運ばない時は思い切つて、発想の転換をはか

ることが大事だそうです。無責任と思われるかもしれないませんが、私を経理担当から外していただくのも一つの方便かと思うのですが？」
思いがけない言葉であった。大阪鉄工所の経営

築種問屋小西儀助商店(現、コニシ株式会社) 明治3年
アサヒビールの前身 明治17年
合成接着剤バンド販売 昭和27年



状態が思わしくなくなったことは秋月の責任ではない。なのに、秋月はいさぎよく身を引こうとしている。それは、やはり武士の魂を今なお引きずっている秋月ならではのいさぎよさかも知れなかった。ハンターはその考え方に心惹かれるものを覚えた。

「秋月サンノコトハ私ノ責任デス。チョット考エサセテ下サイ」

それから数日にわたってハンターは思い悩んだ。これまではがむしゃらに夢を描いて前進するだけで良かったが、今はビジネスのハードルをいかに乗り越えるべきか、そのことに頭を使う毎日である。見るに見かねて愛子と言う。

「前に進むことも大事かもしれませんが、引き下がる勇氣も必要かもしれません」

意外な言葉であった。

「引き下ガル勇氣？ 引き下ガルコトニ勇氣ガイルノカ？」

「いりますわ。前進することより引き下がることの方が勇氣があると私は思います」

「引き下ガルコトハ大阪鉄工所ヲ辞メルコトダガ？」

「そうですね。どれだけ一生懸命にやって来てもこれ以上、無理だとわかったら、勇氣を出して退却することも大事だと私は思います」

そういった意見がここに至って述べられる愛子は、さすが平野常助の娘であった。ものごころついて以来、経営者の家で色々なこ

とを肌で実感して来た。その体験がここに来て自分なりの意見を口に出来る器に成長しているのであった。その一言はハンターにとってずいぶん、役に立つヒントであった。

「退却スル勇氣デスカ？」

「ただ、いたずらに退却するだけではおもしろくありません。これまで協力して下さった人たちに恩で報いる道を探して退却することをお考えになるべきだと私は思います」

愛子とは常日頃から色々なことを話し合い、夫婦が協力して何事もなす習慣をつけているハンターなので、こういった一大事の時には助かる。一人で悩み続けるより、夫婦が共に知恵を出し合つて事にのぞむのである。

「門田サンニ引き受ケテモラオウ」

ハンターが決断した。

「それが一番だと思えます」

愛子もまた、同じ考えだった。

早速、夫婦揃って、門田三郎兵衛のところへ出かけた。今度は下駄の鼻緒が切れるようなこともなく、すんなりと門田家を訪ねることが出来た。ハンター夫妻から現状報告を受けて、門田がしみじみと言う。

「やっぱり、うまくいきませんか？ 困ったことですねえ」

門田は感慨深げに、顎を撫でながら

「ハンターさんのことだから、私はとことん、応援させてもらう積もりで、その気持ちは先日からお分かりいただいている通りですが、どうしてもハ

ンターさん、このまま経営を続けることが難しいですか？」

ありがたい言葉である。心底からハンターのことを思ってくれている門田ならではの気持ちの表れである。ハンターが言葉を返す。

「門田サン、私ハトテモ嬉シイデス。シカシ、コノママ私ガ大阪鉄工所ノ経営ヲ続ケルノハ良クナイコト分カリマシタ。コノママ、私ガ経営スルト大阪鉄工所、二度ト立ち直レナクナリマス、今ノウチニ、経営チェンジシテ、大阪鉄工所守リタイノデス」

横から遠慮がちに愛子が言葉を添える。

「米田左門先生の教えでも、どうしても見込みが立たなくなつた時には、一旦、身を引いて違う角度から経営を立て直すことも大事だと教えていただいています。ハンターが自分の身を守ることが大事か、大阪鉄工所を守ることが大事か、冷静に考えたのです」

夫に代わつて的確に事情を説明できる愛子はまさにこの時代の先端をいく賢夫人と言つても言い過ぎではない。

「で、自分のことよりも、大阪鉄工所を守ることが大事と思われたわけですか？」

「はい。ハンター自身はどのようにしてもやっていきます。ですが、大阪鉄工所はここでつぶしてしまつてはおしまいです」

愛子の言葉にいちいちうなづきながら、門田が真剣に耳を傾ける。ハンターが思い切つて門田に言う。

「私二代ワッテ、大阪鉄工所ヲ経営シテイタダケマセンカ？」

門田がびつくりする。

「まさか！」

「本当デス。私二代ワッテ大阪鉄工所ヲ門田サンニ
守ッテホシイノデス」

ハンターが頭を下げる。愛子も同様二頭を下げて
門田にお願いする。しばらく、腕組みして考えた
末に門田がきっぱりと言う。

「分かりました。お二人からそこまでお願いされた
からには、この門田、引き下がるわけにはいきませ
ん。私でよろしければ、大阪鉄工所、ハンターさん
に代わって経営をお引き受け致しますよう」

経営交代するからには、ハンターにそれ相当の
代償金を用意したいということを門田が口にし
た。

「門田サンガ今後、大阪鉄工所ヲ立派ニ経営シテ下
サルナラ、私ハソレダケ満足デス。代償金ナド貰
ウ氣持ハアリマセン」

それはハンターの本音であつた。しかし、門田は
さすがは大阪の経済界でも指折りの名士であつ
た。

「どうでしょう？ ハンターさんがこれから他の
事業をなさるのにやはり、運転資金が必要だと思
います。どこまでも、あなた方を応援すると約束し
ている私です。ここは一つ、私の気持ちに任せてい
ただけませんか？」

惚れ惚れするほど男っぷりの良い門田であつ
た。数日して、今度はハンターの所に門田が訪れ
た。

「ハンターさん、ご不満かもしれませんが、とりあ
えず、これをお受け取り下さい」

そう言つて差し出した風呂敷包みの中から、洋
銀八千七百ドルが出て来た。

「今後、九回に渡つて同じ金額をお渡ししたいと思
います。親しき仲にも礼儀あり。このように証文も
用意しました」

墨黒々と書かれた文字は、土地、建物、機械、ドッ
ク等一式を譲り受ける代わりに、合計八万七千ド
ルを十回分割で支払うといったことが記されてあ
つた。

「サンキュウベリマッチ！ アリガトゴザイマ
ス！」

ハンターはそれだけ言うのがやつとであつた。
目頭が熱くなつて、証文の字がにじんで見えた。愛
子も同様に胸に込み上げてくるものを覚えた。

「門田さん、このご恩は忘れません」

このようにして、大阪鉄工所はハンターから門
田三郎兵衛にその経営がバトンタッチされた。

明治十七年二月。その翌月にはヨーロッパの憲
法調査を終えた伊藤博文の提案で、立憲政治の導
入を前提に、宮中制度取調局が設置される。そして
その功績によって彼が初代内閣総理大臣に就任す
るのは間近である。

つづく



■三条杜夫(さんじょうもりお)
フリーアナウンサー。放送作家、ルポライター
を経て、放送業界。経歴にもつく地域活
性化講師としての活動も評価されている。
著書に「いのち結んで」「道の道七福神めぐ
り」「まっとうな人」など。

草葉達也の

「私の神戸物語」

④

剪画とみさわかよの

ゲスト 上永吉 英文さん

(Fリーグ デウソン神戸 代表)



フットサルって御存知ですか？

簡単に言ってしまうと室内サッカーなのですが、サッカーと比べると競技場・競技人数・ルール・プレー・スタイルなど異なる部分が多く、手軽さ・ファッショニスタの高さなどから、競技人口が激増中。昨年から、サッカーのJリーグにあたる、フットサルのトップリーグであるFリーグが始まり、さらなる盛り上がり

をみせています。

そんなフットサルのFリーグに所属する「デウソン神戸」のクラブハウスが、中央区のポートアイランドにあります。デウソンという言葉は、神戸の「神」という文字からラテン語のデウスをベースに、昔々荘園と呼ばれていたところが多数あったことから、その二つを組合せた造語で、神戸の地に神が舞い降

りて、古くからの伝統を受継ぎ、世界に飛躍するチームを目指すという意味が込められているそうです。今回お会いした、代表の上永吉英文さんは、学生時代からサッカー選手として輝かしい成績を残し、まだJリーグができる前のヤマハ発動機サッカー部(現・ジュビロ磐田)に入部。選手として活躍されるも、けがに泣かされ、引退後はフットサル運営会社を立ち上げました。そして、デウソン神戸の代表として、フットサルの普及にと忙しいスケジュールをこなされています。

「よろしくお願いします〜」と話し始めた上永吉さんの言葉が関西弁なのに驚きました。

「上永吉さんって、関西人ですか?」「大阪ですよ」「へえ、凄く関東の人というイメージがありました。お住まいも大阪ですか?」「いえ神戸ですよ。もう十三年ぐらいですね」「神戸はどうですか?」「住むのは本当にいいですね。海あるし山あるし空気いいし渋滞ないし(笑) 関西で住むんだったら神戸って決めてましたか

ら。嫁さんが神戸に住みたがつてましたし…… 住むのには最高ですか、芦屋浜ですね。ハーバーランドとか、ブラリアーノというブラジル料理

の店は、選手を連れて本当によく行きますよ。六甲にもカレーをよく食べに行く店がありますね。神戸の人は優しいですね。新しく来た人を受け入れることに慣れてい



筆者(右)と



フットサルスタジオで



徴でもある個人技の高さがデウソン神戸の持ち味でもありますね」「ファッション性の高さから言っても、フットサルは神戸に根付くと思うのですが？」

「フットサルはね、子供と大人だけでなく女性、そしてアスリートも一緒にプレーを楽しめる唯の生涯スポーツだと思います。そのためにはトップチームの選手、サテライ

ね。まだ二年目ですが、十年後にはいつばいになりますよ！」と、自信に溢れる力強い言葉で最後を締めくくってくれました。

引退をして自分探しのために留学をしたブラジルで、フットサルとの運命的な出会いをした上永吉さん。現在、神戸の全ての区に、複数のフットサルコートができていることを考えると、彼の地域に根付いたクラブチーム作りが、花を咲かせるのは時間の問題だと思いました。

ロングヘアーに髭をたくわえ野武士のような迫力のあるイメージは、まさしく日本のフットサル界の風雲児。神戸のスポーツ界の顔になる日も、そう遠くはないでしょう。

くさは たつや

神戸生まれ。作家、ウェブライター。

日本ペンクラブ会員、日本演劇学会会員、神戸芸術文化会議員、元NHK演芸台本研究会会員、兵庫県国際交流協会、宝塚市国際交流協会、

県立芦屋高等学校 特別非常勤講師、2007年兵庫県のじきく賞受賞。

とみさわ かよ

神戸生まれ。映画作家。

日本映画協会会員、認定講師。

神戸芸術文化会議員、

石田良介日本映画協会会長に師事。

神戸のまちとそこに生きる人々を、映画「切り絵」で描き続けている。

ますよ」
「デウソン神戸はFリーグのために作られたチームという印象で、他のチームと比べると開幕前は評価も低かったと思いますが、昨シーズンは最終成績三位と大活躍でしたね」

「指導者がいいとかというより選手が良いです。選手のレベルが凄いです。フットサルで強いチームの特

ト(二軍)、スクール生というようなピラミッド型の組織作り『地』をしつかり作らないとダメだと考えています。そんなクラブチームをこの神戸で作って行きたいですね。それと競技人口は凄く増えてますが、デウソン神戸の試合を観に来てくれる人がまだまだ少ない。その人たちをいかに試合を観に来てもらうかが、これからの私たちの課題です



CWAJメンバーの皆さん

CWAJ(College Women's Association of Japan)は、東京に住む約30カ国の女性たちが会員となり、教育や文化活動を通じて社会貢献をめざし活動している非営利のボランティア団体。1949年、戦後間もなく設立され、アメリカ留学をめざす日本人学生への渡航費用の援助のための募金活動を目的に、日米の女性たちが集まったのが始まり。

年に一度、CWAJ主催で開催される「現代版画展」は、全国に公募され集まった現代版画作品を展示し、その売り上げが、日本で学ぶ外国人女子留学生、海外留学をめざす日本人女子学生、視覚障害のある男女学生への奨学金として、また若手版画家に対する賞を設け、次世代を担う若者たちの支援に利用されている。版画展は今年で53回を数え、これまで東京会場だけだったが、今回初めて神戸での開催が決定し、10月25日、26日に神戸外国倶楽部で行なわれた。

CWAJの本年度会長であるローレル・ダヴさんは「神戸での開催にあたって、会場である神戸外国倶楽部、JAWKの会員の方々などたくさんの方があたたかく迎えてくださり、皆さんのサポートに大変感謝しています」と話した。また、版画展に関しては「今回は約600点の応募の中から187点が選ばれました。伝統的なものから、非常に斬新なデザインの新しい作品が並び、『版画』というものの特徴である多様性がうかがわれる展覧会になったと思います」と。ダヴ会長は、5年前に来日、地域の日本人と交流しながら、社会貢献できる機会を探していたところCWAJに出会った。

版画家たち、そしてCWAJの女性たちの思いが、今年も未来に羽ばたこうとしている若者に大きな翼を与えようとしている。

耳より KObE EXBITION

神戸で初開催の展覧会 収益金は若者の奨学金に— 「第53回CWAJ現代版画展」



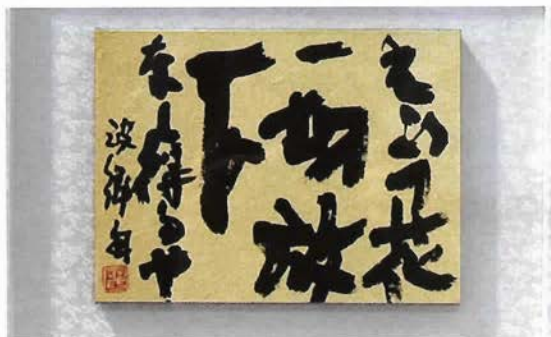
公募、及び招待作家たちの
現代版画作品が並んだ



ローレル・ダヴ会長、ご主人のボブさん



20代から80代までと年齢幅広い名筆会会員の皆さん



主宰・村上翔雲先生の作品「えごの花一切放下なし得るや」



足立告陶書(鈴木漠詩)



六車明峰書(内山思考句)

ことばのイメージを書にして表す “読める書”をめざしてー 「第43回名筆研究会展」

現代書の作家たち集まり、1969年に第1回「現代書展」を開催、1971年に名筆研究会として創立されたこの会は、これまで「詩と書」の出会いを表現し続けてきた。詩や、句のイメージを、書という作品にして表すー現代書家にしかできない「詩の読み方」である。

また、一般の人にはなかなか読みづらい書ではなく、“読める書”にこだわっているのも特徴のひとつだ。作品として成立し、どこか絵画的でありながら、誰でも読める書に、今回の展覧会にも多くの鑑賞者たちが集った。第43回名筆研究会展は、10月22日～26日、兵庫県民アートギャラリーで開催された。

「友をテーマとした」今回の展覧会。谷川俊太郎、金子みすゞらの詩のほか、鈴木漠、伊丹三樹彦、由良佐知子らといった地元の詩人たちの作品も書かれた。「漢字の構築美に対し、かな文字には流動美がある。それらが、渾然一体となった書作品の表現に取り組んでいます」と会員の廣田瑛子さん。本誌のエッセイ「コーヒークップの耳」の題字を手がけている書家・六車明峰さんも会員の一人で、今回は「台風来悪友のごと僕をめざし」という内山思考の句を書にした。「台風が来る映像を思い浮かべ、風が渦巻く海沿いの漁村を想像しながら書きました」と、力強い作品を発表した。



「読める書」で詩や句を書いた作品群に、長く足を止め鑑賞する人も多かった

兵庫県いけばな協会創立55周年記念 「兵庫県いけばな展」各流派の若手作家が参加



8階・9階の2会場で行われたいけばな展



創立55周年を迎えた兵庫県いけばな協会（肥原碩甫会長）が、10月16日～21日に大丸ミュージアム KOBEで記念展を開催。50周年記念展に引き続いて、全国の各流派から若手作家たち

を招き、作品を披露するという、全国的にもあまり類を見ないいけばな展が企画された。「流派ごとの特徴がありつつ、若手らしいパワフルな作品が集まった。同じ年代同士が集まり、刺激し合うこともあり、期間中の交流はとても楽しい」と、展覧会委員長の西村崇さん。兵庫県内だけでなく、東京、埼玉、京都、奈良、和歌山などからも参加があり、期間中は多くの観客であふれた。



西村崇さん 佳正流



佐伯浩甫さん 末生流（庵家）



中山高昌さん 末生流中山文雨会



今回初出瓶の大津智永さん（京都府）都末生流



望月伸之輔さん（東京都）宏道流



初出瓶の安達瞳子さん（東京都）花芸安達流



諸泉聡子さん（兵庫県）専正池坊



神戸に居ながら、京風料理を堪能 「利秀庵」でくつろぎの時間

ポートアイランド市民広場駅からすぐのクオリティホテル内に、2008年4月オープンした利秀庵。京都までわざわざ足を運ばずして、近場で気軽に“京の味”が楽しめる、評判上々のお店だ。

広々とした店内に足を踏み入ると、全面ガラス張りの窓に映し出される庭園の緑に心が和む。京都をはじめ東京、大阪など全国の京料理の店で腕を磨いてきた井上孝仁料理長が、伝統に即した本格茶懐石から、遊び心を巧みに交えた新感覚の京料理まで、バラエティ豊かに味わわせてくれる。たとえばフレンチのデザート?にも見えそうな箸休めの一品は、くもこ(鰯の白子)を丁寧に裏ごししたムースに梅肉ソースをかけたもの。季節により湯葉、かぼちゃのムースと変化する。また、パパイアを丸ごと器に仕立てた汁物は、汁のあと、蒸したパパイアもスプーンですくっていただく、なんとも乙な趣向。「茶懐石」というと敷居が高くなりがち。京の感覚は残しつつ神戸らしい遊び心、地元食材を取り入れた料理を楽しんでほしい」と井上さん。お昼は旬菜膳1,800円、懐石4,600円～など。夜の懐石コースは5,000円～、炙りカウンターで気軽に一品料理を楽しむこともできる。また、結納、宴会に利用できる和室もあり、ゆったりとした和の空間を利用した披露宴などの相談にのってもらえるのもホテルならではの懐の深さ。今後ますます利用できそうな新スポットの登場だ。



山陰流包丁式の流れを汲む卓越した技を持つ、
総料理長・井上孝仁さん。

真魚鯉の西京焼き。
旬の魚により価格は異なる。



蒸しパパイア・ふかひれスープ仕立て。
(15,000円の懐石コースから)



くもこ(鰯の白子)のムース梅肉餡かけ800円



庭園の緑とやさらかな陽光が
心を落ち着かせてくれる、広々とした店内。



夜は炙りカウンターで、淡路など
近海でとれた新鮮な魚介や地鶏を

■京風料理 利秀庵

☎078-303-5561

神戸市中央区港島中町6-1

クオリティホテル神戸 1F

営業時間/11:30~14:30 (LO14:00)

17:00~21:30 (LO20:30)

無休



神戸を愛するナガサワ文具センターの オリジナル「Kobe INK 物語」好評!

なんと粋な、神戸らしい商品だろう。思わず「おしゃれ!」と声をあげてしまった。

「Kobe INK 物語」は、ナガサワ文具センターオリジナルのカラーインク。マネージャーの竹内直行さんが「セーラー万年筆」の技術者と話し合いを重ねながら開発を手がけた。神戸の街が大好きという竹内さんらしく、「北野異人館レッド」「旧居留地セピア」「六甲グリーン」など、その土地「らしい」色合いが、なんとも良い。「海峡ブルー」なんて泣かせる色合いだ。有馬の旅館のご主人と考案した「有馬アンバー」など、各色それぞれに開発ストーリーがあるのだという。『神戸セレクション2008』にも選ばれたこの商品、新聞や雑誌で紹介されたことから人気は全国的に広まり、首都圏など神戸以外からの注文も多いとか。「このインクで、全国の皆さんに“神戸からの手紙”を書いていただければ」と竹内さん。

11月には「生田オレンジ」「布引エメラルド」「岡本ピンク」「摩耶ラピス」の新色4色が発売された。センター街のジュンク堂書店3階、ナガサワ文具センターとなりの、ちょっとこだわり派の文具がそろった「NAGASAWA Pen Style DEN」で取り扱っている。現在全14色。各色とも50cc入り1,575円(税込)。



生田さんの鳥居を思わせる「生田オレンジ」など新色4色



発売以来大ヒット商品となった「KOBÉ INK物語」



こだわり派の文具店
「NAGASAWA Pen Style DEN」で
人気のガラスペン



開発を手がけたマネージャー竹内直行さん(右)



■NAGASAWA
Pen Style DEN
☎078-321-3333
神戸市中央区三宮町
1丁目6番18号
ジュンク堂書店三宮店3階
営業 10:00~21:00